

原料原産地表示の対象として追加すべき品目についての要望

今回要望のあった品目

- ・豆腐(8件)
- ・納豆(7件)
- ・みそ(6件)
- ・しょうゆ(6件)
- ・あん(加糖あん)及びあんを使用した和菓子、あんパン等(1件)
- ・もち(もち米粉を使用したもの)(1件)
- ・米菓(せんべい、あられ)(1件)
- ・小麦粉(4件)
- ・パン(5件)
- ・うどん(5件)
- ・クッキー(1件)
- ・そば(5件)
- ・バターピーナッツ(1件)
- ・シリアル(1件)
- ・果実飲料(14件)
- ・野菜飲料(1件)
- ・緑茶飲料(26件)
- ・大豆油(1件)
- ・食肉加工食品群(1件)
(ハム、ベーコン、ソーセージ、牛タン、
牛丼のもと、ローストビーフ、鶏の唐揚げ等)
- ・魚介類冷凍食品(1件)
(魚すり身、ポイルむきえび・いか・貝等)
- ・のり加工品(32件)
- ・こんぶ加工品(16件)

(参考)

今回要望はなかったが、政策提案等で要望があるとして
共同会議で紹介した品目

- ・惣菜(おでん種大根等)
- ・冷凍食品(フライ種)

品目	主な意見	件数	選定要件との関係																								
豆腐	<p>・外国からの輸入量が多く、原産地により品質に差異があり、日常生活において購入頻度が非常に高く、消費者の原料原産地についての関心が高い食品である。(同様の意見を含め5件:個人、消費者団体)</p> <p>・原材料となる大豆の自給率は約3.5%(平成16年度食料需給表)とその多くを輸入に依存しているにもかかわらず、製品に原料大豆の原料原産地表示はなされていない。豆腐、納豆、醤油などに関しては国内産大豆を使用した場合のみ、その旨、任意に表示されている物が見受けられる。事業者にとってメリットがあると思われるもののみ表示されていると考えられるが、一方的な表示は不公正である。近年海外の大豆は遺伝子組換えしたものが多い。他方「遺伝子組換え大豆を使用していません」などの表示も多く見られることから消費者の選択のために大豆製品群の原料原産地表示を提供すべきである。(1件:消費者団体)</p> <p>・遺伝子組換え大豆を使った豆腐、納豆等が多くなっている現在、消費者の食の安全を指向する見地から必要な原産地表示を要望。(1件:個人)</p>	8件	○豆腐・油揚げの生産量(単位:千トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>1,452</td> <td>1,451</td> <td>1,451</td> <td>1,457</td> <td>1,457</td> <td>1,463</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>100</td> <td>100</td> <td>100</td> <td>100</td> <td>101</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		1,452	1,451	1,451	1,457	1,457	1,463	-	変化率	100	100	100	100	100	101	-
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				1,452	1,451	1,451	1,457	1,457	1,463	-																	
			変化率	100	100	100	100	100	101	-																	
			生産量は業界聞き取りを基とする。																								
			○大豆の輸入量(単位:トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>4,884,212</td> <td>4,829,378</td> <td>4,831,951</td> <td>5,038,937</td> <td>5,172,520</td> <td>4,407,103</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>99</td> <td>99</td> <td>103</td> <td>106</td> <td>90</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		4,884,212	4,829,378	4,831,951	5,038,937	5,172,520	4,407,103	-	変化率	100	99	99	103	106	90	-
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				4,884,212	4,829,378	4,831,951	5,038,937	5,172,520	4,407,103	-																	
変化率	100	99	99	103	106	90	-																				
○加工度、原料の原産地による品質の差異、原料の調達先																											
<p>・加工度 大豆を水に浸漬し破碎後煮沸。裏漉し後凝固剤を添加し固める</p> <p>・主な原料の主な輸入先 大豆の輸入先:アメリカ72% ブラジル18% 中国4%(平成16年) 国産大豆使用率...約27%(豆腐・油揚げ)</p>																											
○実行可能性(原料の産地の変化、中間加工原料の使用)																											
原料の産地の変化:原料の安定調達のため頻繁に産地を変更																											
○類似、近縁の食品で原料原産地表示の対象となっているか否か																											
○備考																											
<p>・20食品群選定時に対象とされなかった理由 豆腐については、身近な食品であり義務表示が必要との意見がある一方、原料の混合、切り替えが頻繁に起こること、中小零細企業が多くその都度包装を変更することは困難なこと等から、直ちに義務化のための告示は行わず、ガイドライン又は公正競争規約などにより表示の普及に努めるとともに、実行可能な表示方法を実証的に検討した後、おおむね2年後を目途に、表示の実施状況をふまえ、義務表示に移行するか否かについて共同会議において検討する。</p> <p>「国産大豆使用」等の強調表示をした製品が多く存在することは、「原産地に由来する原料の品質が製品の品質に反映されると一般的に認識されている」と言うことと置き換えられる。</p> <p>一般に消費者が食する頻度が高い、伝統的な食品であり、他の食品と比べて特に消費者の誤認を防止する必要がある。</p> <p>原料の切替が頻繁に行われることをふまえた表示方法については、業界の実態を踏まえた現実的な方法を今後検討する必要がある。</p> <p>原料の混合使用や切替が頻繁に行われること、零細企業が多いこと等から、表示の実行可能性について現時点では困難と言わざるを得ない。</p> <p>・現在、「豆腐・納豆の原料大豆原産地表示に関する検討会」が開催され、ガイドライン作成が検討されている。</p>																											

品目	主な意見	件数	選定要件との関係																								
納豆	<p>・外国からの輸入量が多く、原産地により品質に差異があり、日常生活において購入頻度が非常に高く、消費者の原料原産地についての関心が高い食品である。(同様の意見を含め5件:個人、消費者団体)</p> <p>・原材料となる大豆の自給率は約3.5%(平成16年度食料需給表)とその多くを輸入に依存しているにもかかわらず、製品に原料大豆の原料原産地表示はなされていない。豆腐、納豆、醤油などに関しては国内産大豆を使用した場合のみ、その旨、任意に表示されている物が見受けられる。事業者にとってメリットがあると思われるもののみ表示されていると考えられるが、一方的な表示は不公正である。近年海外の大豆は遺伝子組換えしたものが多く、他方「遺伝子組換え大豆を使用していません」などの表示も多く見られることから消費者の選択のために大豆製品群の原料原産地表示を提供すべきである。(1件:消費者団体)</p> <p>・遺伝子組換え大豆を使った豆腐、納豆等が多くなっている現在、消費者の食の安全を指向する見地から必要な原産地表示を要望。(1件:個人)</p>	7件	○納豆の生産量(単位:千トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>229</td> <td>220</td> <td>232</td> <td>254</td> <td>247</td> <td>250</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>96</td> <td>101</td> <td>111</td> <td>108</td> <td>109</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		229	220	232	254	247	250	-	変化率	100	96	101	111	108	109	-
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				229	220	232	254	247	250	-																	
			変化率	100	96	101	111	108	109	-																	
			生産量は業界聞き取りを基とする。																								
			○大豆の輸入量(単位:トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>4,884,212</td> <td>4,829,378</td> <td>4,831,951</td> <td>5,038,937</td> <td>5,172,520</td> <td>4,407,103</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>99</td> <td>99</td> <td>103</td> <td>106</td> <td>90</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		4,884,212	4,829,378	4,831,951	5,038,937	5,172,520	4,407,103	-	変化率	100	99	99	103	106	90	-
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				4,884,212	4,829,378	4,831,951	5,038,937	5,172,520	4,407,103	-																	
変化率	100	99	99	103	106	90	-																				
○加工度、原料の産地による品質の差異、原料の調達先																											
<p>・加工度 大豆を水に浸漬後煮沸。納豆菌を混合し発酵</p> <p>・主な原料の主な輸入先 大豆の輸入先:アメリカ72% ブラジル18% 中国4%(平成16年) 国産大豆使用率…12%</p>																											
○実行可能性(原料の産地の変化、中間加工原料の使用)																											
・原料の産地の変化:原料の安定調達のため産地を変更																											
○類似、近縁の食品で原料原産地表示の対象となっているか否か																											
○備考																											
<p>・20食品群選定時に対象とされなかった理由 納豆については、身近な食品であり義務表示が必要との意見がある一方、原料の混合、切り替えが頻繁に起こること、中小零細企業が多くその都度包装を変更することは困難なこと等から、直ちに義務化のための告示は行わず、ガイドライン又は公正競争規約などにより表示の普及に努めるとともに、実行可能な表示方法を実証的に検討した後、おおむね2年後を目途に、表示の実施状況をふまえ、義務表示に移行するか否かについて共同会議において検討する。</p> <p>「国産大豆使用」等の強調表示をした製品が多く存在することは、「原産地に由来する原料の品質が製品の品質に反映されると一般的に認識されている」と言うことと置き換えられる。</p> <p>一般に消費者が食する頻度が高い、伝統的な食品であり、他の食品と比べて特に消費者の誤認を防止する必要がある。</p> <p>原料の切替が頻繁に行われることをふまえた表示方法については、業界の実態を踏まえた現実的な方法を今後検討する必要がある。</p> <p>原料の混合使用や切替が頻繁に行われること、零細企業が多いこと等から、表示の実行可能性について現時点では困難と言わざるを得ない。</p> <p>・現在、「豆腐・納豆の原料大豆原産地表示に関する検討会」が開催され、ガイドライン作成が検討されている。</p>																											

品目	主な意見	件数	選定要件との関係																								
みそ	<p>・外国からの輸入量が多く、原産地により品質に差異があり、日常生活において購入頻度が非常に高く、消費者の原料原産地についての関心が高い食品である。(同様の意見を含め5件:個人、消費者団体)</p> <p>・原材料となる大豆の自給率は約3.5%(平成16年度食料需給表)とその多くを輸入に依存しているにもかかわらず、製品に原料大豆の原料原産地表示はなされていない。豆腐、納豆、醤油などに関しては国内産大豆を使用した場合のみ、その旨、任意に表示されている物が見受けられる。事業者にとってメリットがあると思われるもののみ表示されていると考えられるが、一方的な表示は不公正である。近年海外の大豆は遺伝子組換えしたものが多い。他方「遺伝子組換え大豆を使用していません」などの表示も多く見られることから消費者の選択のために大豆製品群の原料原産地表示を提供すべきである。(1件:消費者団体)</p>	6件																									
			○みその生産量(単位:千トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>543</td> <td>533</td> <td>526</td> <td>524</td> <td>510</td> <td>508</td> <td>497</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>98</td> <td>97</td> <td>97</td> <td>94</td> <td>94</td> <td>92</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		543	533	526	524	510	508	497	変化率	100	98	97	97	94	94	92
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				543	533	526	524	510	508	497																	
			変化率	100	98	97	97	94	94	92																	
			○大豆の輸入量(単位:トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>4,884,212</td> <td>4,829,378</td> <td>4,831,951</td> <td>5,038,937</td> <td>5,172,520</td> <td>4,407,103</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>99</td> <td>99</td> <td>103</td> <td>106</td> <td>90</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		4,884,212	4,829,378	4,831,951	5,038,937	5,172,520	4,407,103	-	変化率	100	99	99	103	106	90	-
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				4,884,212	4,829,378	4,831,951	5,038,937	5,172,520	4,407,103	-																	
変化率	100	99	99	103	106	90	-																				
<p>○加工度 原料の原産地による品質の差異、原料の調達先</p> <p>・加工度 大豆、米、麦等を蒸煮した後、大豆等を蒸煮してこうじ菌を培養したものを加えたものに食塩を交合し、これを発酵、熟成させた、半固体状のもの</p> <p>・主な原料の主な輸入先 大豆の輸入先 アメリカ72% ブラジル18% 中国4%(平成16年)</p>																											
<p>○実行可能性(原料の産地の変化、中間加工原料の使用)</p> <p>・原料の産地の変化:原料の安定調達のため産地を変更</p>																											
○類似、近縁の食品で原料原産地表示の対象となっているか否か																											
○備考																											

品目	主な意見	件数	選定要件との関係																								
しょうゆ	<p>・外国からの輸入量が多く、原産地により品質に差異があり、日常生活において購入頻度が非常に高く、消費者の原料原産地についての関心が高い食品である。(同様の意見を含め5件:個人、消費者団体)</p> <p>・原材料となる大豆の自給率は約3.5%(平成16年度食料需給表)とその多くを輸入に依存しているにもかかわらず、製品に原料大豆の原料原産地表示はなされていない。豆腐、納豆、醤油などに関しては国内産大豆を使用した場合のみ、その旨、任意に表示されている物が見受けられる。事業者にとってメリットがあると思われるもののみ表示されていると考えられるが、一方的な表示は不公正である。近年海外の大豆は遺伝子組換えしたものが多い。他方「遺伝子組換え大豆を使用していません」などの表示も多く見られることから消費者の選択のために大豆製品群の原料原産地表示を提供すべきである。(1件:消費者団体)</p>	6件	○しょうゆの生産量(単位:千キロリットル)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>1,043</td> <td>1,065</td> <td>1,027</td> <td>999</td> <td>981</td> <td>954</td> <td>939</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>102</td> <td>98</td> <td>96</td> <td>94</td> <td>91</td> <td>90</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		1,043	1,065	1,027	999	981	954	939	変化率	100	102	98	96	94	91	90
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				1,043	1,065	1,027	999	981	954	939																	
			変化率	100	102	98	96	94	91	90																	
			○大豆の輸入量(単位:トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>4,884,212</td> <td>4,829,378</td> <td>4,831,951</td> <td>5,038,937</td> <td>5,172,520</td> <td>4,407,103</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>99</td> <td>99</td> <td>103</td> <td>106</td> <td>90</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		4,884,212	4,829,378	4,831,951	5,038,937	5,172,520	4,407,103	-	変化率	100	99	99	103	106	90	-
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				4,884,212	4,829,378	4,831,951	5,038,937	5,172,520	4,407,103	-																	
			変化率	100	99	99	103	106	90	-																	
○加工度 原料の原産地による品質の差異、原料の調達先																											
<ul style="list-style-type: none"> ・加工度 大豆(脱脂加工大豆を含む)、麦、米等を蒸煮等の方法で処理してこうじ菌を培養したもの等に、食塩水等を加え、発酵、熟成させて得られた清澄な液体調味料 ・主な原料の主な輸入先 大豆の輸入先:アメリカ72% ブラジル18% 中国4%(平成16年) 																											
○実行可能性(原料の産地の変化、中間加工原料の使用)																											
<ul style="list-style-type: none"> ・原料の産地の変化:原料の安定調達のため産地を変更 ・中間加工原料として脱脂加工大豆を使用: 脱脂加工大豆を使用したしょうゆは全体の7~8割を占め、脱脂加工大豆は油脂メーカーを通じて流通段階を経て供給される。(搾油後での原産地の特定は難しい) 																											
○類似、近縁の食品で原料原産地表示の対象となっているか否か																											
○備考																											

品目	主な意見	件数	選定要件との関係																								
・あん(加糖あん)及びあんを使用した和菓子、あんパン等	<p>・現在、小豆等の「あん」については、国産・北海道産及び輸入小豆を原料とした「国内製造されたあん」と「輸入加糖あん」によって構成され、その消費においては、原料等による品質の格差が製品価格・価値に反映されていると考えられる。</p> <p>「無糖あん等」の原料原産地表示義務化は、最終製品の表示義務化への第一段階と捉えており、消費者が、最終製品である「和菓子」及び「あんぱん」等の商品選択時に、原料原産地を的確に把握できることが求められており、原料原産地の早急なる表示義務化を要望する。</p> <p>(1件:事業者団体)</p>	1件	選定要件との関係																								
			○あん類(生あん、練りあん、乾燥あん)の生産量(単位:トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>288,540</td> <td>287,700</td> <td>276,621</td> <td>274,060</td> <td>265,460</td> <td>257,496</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>100</td> <td>96</td> <td>95</td> <td>92</td> <td>89</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		288,540	287,700	276,621	274,060	265,460	257,496	-	変化率	100	100	96	95	92	89	-
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				288,540	287,700	276,621	274,060	265,460	257,496	-																	
			変化率	100	100	96	95	92	89	-																	
			○原料(小豆)の輸入量(単位:トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>29,371</td> <td>30,498</td> <td>24,919</td> <td>27,931</td> <td>29,696</td> <td>33,127</td> <td>20,744</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>104</td> <td>85</td> <td>95</td> <td>101</td> <td>113</td> <td>71</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		29,371	30,498	24,919	27,931	29,696	33,127	20,744	変化率	100	104	85	95	101	113	71
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				29,371	30,498	24,919	27,931	29,696	33,127	20,744																	
変化率	100	104	85	95	101	113	71																				
○原料(さやなしのささげ属又はいんげん豆属の豆の調製品(加糖))の輸入量(単位:トン)																											
<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>55,305</td> <td>58,113</td> <td>70,410</td> <td>80,037</td> <td>80,622</td> <td>84,951</td> <td>90,982</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>105</td> <td>127</td> <td>145</td> <td>146</td> <td>154</td> <td>165</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		55,305	58,113	70,410	80,037	80,622	84,951	90,982	変化率	100	105	127	145	146	154	165			
	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																				
	55,305	58,113	70,410	80,037	80,622	84,951	90,982																				
変化率	100	105	127	145	146	154	165																				
○加工度、原料の原産地による品質の差異、原料の調達先																											
<p>・加工度 小豆等の豆を煮沸し、砂糖を加えて練ったもの、又は、生あんに砂糖を加えて加熱しながら練ったもの 和菓子、あんパン等については、あん以外の原材料と組合せて加工される</p> <p>・主な原料(中間加工原料も含む)の主な輸入先 小豆の輸入先:中国80%、カナダ14%(平成17年) さやなしのささげ属又はいんげん豆属の豆の調製品(加糖)(いわゆる加糖あん)の輸入量: 中国97%、フィリピン2%、(平成17年)</p>																											
○実行可能性(原料の産地の変化、中間加工原料の使用)																											
<p>・中間加工原料の使用:加糖あんを調製し最終製品を製造する場合がある。</p> <p>・和菓子、あんパンについては、加糖あんを中間加工品として使用する場合がある。</p>																											
○類似、近縁の食品で原料原産地表示の対象となっているか否か																											
<p>生あん(加糖されていないもの)については、表示義務(20食品群)の対象である。</p> <p>ゆで・蒸し系の農産物加工食品については、調味したものは対象外となっている。</p>																											
○備考																											
<p>・20食品群選定時に対象とされなかった理由 糖を加えたものは調味したものとして、煮豆などと同様に対象から除く。 あんパン、和菓子のような2次加工品については、以下のような問題から、現時点での表示義務化は不適当である。</p> <p>①多くの原料を使用し、多段階の加工工程を経たあんパン、和菓子のような食品は、加工度が低いとは言えない。</p> <p>②あんの原料原産地表示がまだ行われていない状況で、正確な表示が困難。</p> <p>③パンの中であんパンのあんの原料原産地のみ表示を義務付けることは不適当。</p>																											

品目	主な意見	件数	選定要件との関係																								
<p>・もち(もち米粉を使用したもの)</p>	<p>・「もち米粉」を主原料として製造された「もち」は、食味等において違いがあるものの「もち米を原料としたもち」と「もち米粉を主原料としたもち」とを購入時に区別することは困難な商品である。 もち米粉を主原料とする「もち」製品の流通量は、増加しているものと思われるが必ずしも使用原料が明確に記載されていないことから消費者の問い合わせや苦情もよせられている。 もち米粉は、産地によりもち米の性状(タイは長粒種、中国は中・短粒種、アメリカは中粒種、日本は短粒種)が異なるため、原料品質に違いがある。 もち米粉は、米粉調整品としてタイ、中国、アメリカなど多様な国から輸入され、年々増加傾向にある。なお、もち米粉の原産地を特定することは貿易統計からも比較的容易である。 (1件:事業者団体)</p>	1件	○包装もちの生産量(単位:千トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>55.5</td> <td>56.6</td> <td>57.8</td> <td>57.4</td> <td>56.9</td> <td>51.6</td> <td>53.4</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>102</td> <td>104</td> <td>103</td> <td>103</td> <td>93</td> <td>96</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		55.5	56.6	57.8	57.4	56.9	51.6	53.4	変化率	100	102	104	103	103	93	96
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				55.5	56.6	57.8	57.4	56.9	51.6	53.4																	
			変化率	100	102	104	103	103	93	96																	
			○もちの輸入量(単位:Kg)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>-</td> <td>9,582</td> <td>21,395</td> <td>15,360</td> <td>8,303</td> <td>4,079</td> <td>17,364</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>-</td> <td>100</td> <td>223</td> <td>160</td> <td>87</td> <td>43</td> <td>181</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		-	9,582	21,395	15,360	8,303	4,079	17,364	変化率	-	100	223	160	87	43	181
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				-	9,582	21,395	15,360	8,303	4,079	17,364																	
			変化率	-	100	223	160	87	43	181																	
			○原料(もち粉)の生産量(単位:千トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>23</td> <td>23</td> <td>21</td> <td>21</td> <td>21</td> <td>20</td> <td>20</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>100</td> <td>91</td> <td>91</td> <td>91</td> <td>87</td> <td>87</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		23	23	21	21	21	20	20	変化率	100	100	91	91	91	87	87
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				23	23	21	21	21	20	20																	
			変化率	100	100	91	91	91	87	87																	
○原料(米粉調製品)の輸入量(単位:トン)																											
<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>97,970</td> <td>107,134</td> <td>106,157</td> <td>102,499</td> <td>111,761</td> <td>122,324</td> <td>120,633</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>109</td> <td>108</td> <td>105</td> <td>114</td> <td>125</td> <td>123</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		97,970	107,134	106,157	102,499	111,761	122,324	120,633	変化率	100	109	108	105	114	125	123			
	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																				
	97,970	107,134	106,157	102,499	111,761	122,324	120,633																				
変化率	100	109	108	105	114	125	123																				
○加工度、原料の原産地による品質の差異、原料の調達先																											
<p>・原料の違いによる品質の差異:もちについては、もち米から製造されるものと、もち米粉等から製造されるものがあり、両者には品質に差がある。原材料名欄には、原材料として使用した状態「もち米」、「もち米粉」とそれぞれ記述する必要がある。</p> <p>・主な原料(中間加工原料)の主な輸入先 米粉調製品の輸入先:タイ37%、中国33%、アメリカ28%(平成18年1~2月実績)</p>																											
○実行可能性(原料の産地の変化、中間加工原料の使用)																											
<p>・中間加工原料の使用:輸入された米粉調製品を原料として使用する場合がある。</p>																											
○類似、近縁の食品で原料原産地表示の対象となっているか否か																											
<p>もち(もち米を使用したもの)については、表示義務(20食品群)の対象である。</p>																											
○備考																											
<p>・20食品群選定時に対象とされなかった理由 もちの原料がもち米ではなくもち米粉の場合には、輸入されるもち米粉の原料であるもち米の原産地の情報が得られないことから、別の扱いとすべき。</p>																											

品目	主な意見	件数	選定要件との関係																								
・米菓(せんべい・あられ)	・20品目にもちが含まれているので、おかき、せんべい、クッキーなどもちに類似し、一種類の原料で作られる製品に表示を義務づけることは容易であると考え。(1件:消費者団体)	1件	○米菓の生産量(単位:千トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>214</td> <td>212</td> <td>210</td> <td>210</td> <td>211</td> <td>207</td> <td>212</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>99</td> <td>98</td> <td>98</td> <td>99</td> <td>97</td> <td>99</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		214	212	210	210	211	207	212	変化率	100	99	98	98	99	97	99
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				214	212	210	210	211	207	212																	
			変化率	100	99	98	98	99	97	99																	
			○米の輸入量(単位:千トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>664</td> <td>656</td> <td>646</td> <td>651</td> <td>706</td> <td>787</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>99</td> <td>97</td> <td>98</td> <td>106</td> <td>119</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		664	656	646	651	706	787	-	変化率	100	99	97	98	106	119	-
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				664	656	646	651	706	787	-																	
			変化率	100	99	97	98	106	119	-																	
○加工度、原料の原産地による品質の差異、原料の調達先																											
・加工度:精米を蒸米し混捏後成型、さらに乾燥、味付、焼成																											
・主な原料の主な輸入先:米の輸入先:アメリカ51% タイ16% 中国15% オーストラリア2%(平成15年)																											
○実行可能性(原料の産地の変化、中間加工原料の使用)																											
・中間加工原料の使用:輸入された米粉や米粉調製品等を原料として使用する場合がある。																											
○類似、近縁の食品で原料原産地表示の対象となっているか否か																											
もち(もち米を使用したもの)については、表示義務(20食品群)の対象である。																											
○備考																											

品目	主な意見	件数	選定要件との関係																								
小麦粉	・外国からの輸入量が多く、原産地により品質に差異があり、日常生活において購入頻度が非常に高く、消費者の原料原産地についての関心が高い食品である。(同様の意見を含め4件:消費者団体)	4件	○小麦粉の生産量(単位:千トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>4,627</td> <td>4,624</td> <td>4,646</td> <td>4,582</td> <td>4,633</td> <td>4,688</td> <td>4,615</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>100</td> <td>100</td> <td>99</td> <td>100</td> <td>101</td> <td>100</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		4,627	4,624	4,646	4,582	4,633	4,688	4,615	変化率	100	100	100	99	100	101	100
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				4,627	4,624	4,646	4,582	4,633	4,688	4,615																	
			変化率	100	100	100	99	100	101	100																	
			○小麦の輸入量(単位:千トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>5,973</td> <td>5,854</td> <td>5,521</td> <td>5,863</td> <td>5,246</td> <td>5,490</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>98</td> <td>92</td> <td>98</td> <td>88</td> <td>92</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		5,973	5,854	5,521	5,863	5,246	5,490	-	変化率	100	98	92	98	88	92	-
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				5,973	5,854	5,521	5,863	5,246	5,490	-																	
			変化率	100	98	92	98	88	92	-																	
			○加工度、原料の原産地による品質の差異、原料の調達先																								
			<ul style="list-style-type: none"> ・加工度 小麦を挽く、小麦粉の種類(品質)にあわせてブレンド ・主な原料の主な輸入先 小麦の輸入国:アメリカ 56% オーストラリア 22% カナダ 21%(平成16年) 																								
○実行可能性(原料の産地の変化、中間加工原料の使用)																											
○類似、近縁の食品で原料原産地表示の対象となっているか否か																											
○備考																											

品目	主な意見	件数	選定要件との関係																								
パン	・外国からの輸入量が多く、原産地により品質に差異があり、日常生活において購入頻度が非常に高く、消費者の原料原産地についての関心が高い食品である。(同様の意見を含め5件:個人、消費者団体)	5件	○パンの生産量(単位:千トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>1,250</td> <td>1,279</td> <td>1,272</td> <td>1,245</td> <td>1,247</td> <td>1,243</td> <td>1,232</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>102</td> <td>102</td> <td>100</td> <td>100</td> <td>99</td> <td>99</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		1,250	1,279	1,272	1,245	1,247	1,243	1,232	変化率	100	102	102	100	100	99	99
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				1,250	1,279	1,272	1,245	1,247	1,243	1,232																	
			変化率	100	102	102	100	100	99	99																	
			○小麦の輸入量(単位:千トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>5,973</td> <td>5,854</td> <td>5,521</td> <td>5,863</td> <td>5,246</td> <td>5,490</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>98</td> <td>92</td> <td>98</td> <td>88</td> <td>92</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		5,973	5,854	5,521	5,863	5,246	5,490	-	変化率	100	98	92	98	88	92	-
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				5,973	5,854	5,521	5,863	5,246	5,490	-																	
			変化率	100	98	92	98	88	92	-																	
			○加工度、原料の原産地による品質の差異、原料の調達先																								
			<ul style="list-style-type: none"> ・加工度 小麦粉又はこれに穀粉類を加えたものを主原料とし、これにイーストを加えたもの又はこれらに水、食塩、果実、乳製品等を加えたものを練り合わせ、発酵させたものを焼いたもの ・主な原料の主な輸入先 小麦の輸入国:アメリカ 56% オーストラリア 22% カナダ 21%(平成16年) 																								
○実行可能性(原料の産地の変化、中間加工原料の使用)																											
○類似、近縁の食品で原料原産地表示の対象となっているか否か																											
○備考																											

品目	主な意見	件数	選定要件との関係																								
うどん	<p>・外国からの輸入量が多く、原産地により品質に差異があり、日常生活において購入頻度が非常に高く、消費者の原料原産地についての関心が高い食品である。(同様の意見を含め5件:個人、消費者団体)</p>	5件	○生うどん(生、ゆで)の生産量(単位:小麦粉使用トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>244,025</td> <td>250,066</td> <td>253,539</td> <td>249,688</td> <td>254,137</td> <td>246,095</td> <td>239,613</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>102</td> <td>104</td> <td>102</td> <td>104</td> <td>101</td> <td>98</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		244,025	250,066	253,539	249,688	254,137	246,095	239,613	変化率	100	102	104	102	104	101	98
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				244,025	250,066	253,539	249,688	254,137	246,095	239,613																	
			変化率	100	102	104	102	104	101	98																	
			○乾うどん(うどん、ひらめん、ひやむぎ、そうめん、手延うどん、手延ひやむぎ、手延そうめん)の生産量(単位:小麦粉使用トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>191,983</td> <td>186,114</td> <td>190,581</td> <td>177,296</td> <td>179,733</td> <td>176,375</td> <td>171,981</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>97</td> <td>99</td> <td>92</td> <td>94</td> <td>92</td> <td>90</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		191,983	186,114	190,581	177,296	179,733	176,375	171,981	変化率	100	97	99	92	94	92	90
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				191,983	186,114	190,581	177,296	179,733	176,375	171,981																	
			変化率	100	97	99	92	94	92	90																	
			○小麦の輸入量(単位:千トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>5,973</td> <td>5,854</td> <td>5,521</td> <td>5,863</td> <td>5,246</td> <td>5,490</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>98</td> <td>92</td> <td>98</td> <td>88</td> <td>92</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		5,973	5,854	5,521	5,863	5,246	5,490	-	変化率	100	98	92	98	88	92	-
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				5,973	5,854	5,521	5,863	5,246	5,490	-																	
			変化率	100	98	92	98	88	92	-																	
○加工度、原料の原産地による品質の差異、原料の調達先																											
<ul style="list-style-type: none"> ・加工度 小麦粉を原料とし、水等を加え練り合わせた後、製麺 ・主な原料の主な輸入先 小麦の輸入国:アメリカ 56% オーストラリア 22% カナダ 21%(平成16年) 																											
○実行可能性(原料の産地の変化、中間加工原料の使用)																											
○類似、近縁の食品で原料原産地表示の対象となっているか否か																											
○備考																											

品目	主な意見	件数	選定要件との関係																								
クッキー	・20品目にもちが含まれているので、おかき、せんべい、クッキーなどもちに類似し、一種類の原料で作られる製品に表示を義務づけることは容易であると考え。(1件:消費者団体)	1件	○ビスケットの生産量(単位:千トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>219</td> <td>223</td> <td>218</td> <td>210</td> <td>219</td> <td>214</td> <td>213</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>102</td> <td>100</td> <td>96</td> <td>100</td> <td>98</td> <td>97</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		219	223	218	210	219	214	213	変化率	100	102	100	96	100	98	97
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				219	223	218	210	219	214	213																	
			変化率	100	102	100	96	100	98	97																	
			○小麦の輸入量(単位:千トン)																								
			<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成11年</th> <th>平成12年</th> <th>平成13年</th> <th>平成14年</th> <th>平成15年</th> <th>平成16年</th> <th>平成17年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>5,973</td> <td>5,854</td> <td>5,521</td> <td>5,863</td> <td>5,246</td> <td>5,490</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>変化率</td> <td>100</td> <td>98</td> <td>92</td> <td>98</td> <td>88</td> <td>92</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		5,973	5,854	5,521	5,863	5,246	5,490	-	変化率	100	98	92	98	88	92	-
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年																	
				5,973	5,854	5,521	5,863	5,246	5,490	-																	
			変化率	100	98	92	98	88	92	-																	
○加工度、原料の原産地の品質の差異、原料の調達先																											
<ul style="list-style-type: none"> ・加工度 小麦粉にバター、砂糖、卵等の他原料と混合し焼成 ・主な原料の主な輸入先 小麦の輸入国:アメリカ 56% オーストラリア 22% カナダ 21%(平成16年) 																											
○実行可能性(原料の産地の変化、中間加工原料の使用)																											
○類似、近縁の食品で原料原産地表示の対象となっているか否か																											
○備考																											

品目	主な意見	件数	選定要件との関係							
・そば	・外国からの輸入量が多く、原産地により品質に差異があり、日常生活において購入頻度が非常に高く、消費者の原料原産地についての関心が高い食品である。(同様の意見を含め5件:個人、消費者団体)	5件	○日本そば等(生めん、乾めん、即席和風めん)の生産量(単位:トン(そば粉使用量))							
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年
			46,220	46,401	47,419	47,599	46,593	—	—	
			変化率	100	100	103	103	101	—	
			○そばの生産量(単位:トン)							
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年
			24,000	29,200	27,300	26,600	28,100	21,500	—	
			変化率	100	122	114	111	117	90	
			○そばの輸入量(単位:トン)							
				平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年
			103,290	97,050	92,722	90,659	91,960	89,545	84,919	
			変化率	100	94	90	88	89	87	
			○加工度、原料の原産地による品質の差異、原料の調達先							
			・加工度							
			そばを粉碎後、そば粉又はそば粉及び小麦粉を原料とし、水等を加え練り合わせた後、製麺							
・主な原料の主な輸入先										
玄そばの輸入国:中国86%、米国13%(平成17年)										
○実行可能性(原料の産地の変化、中間加工原料の使用)										
○類似、近縁の食品で原料原産地表示の対象となっているか否か										
○備考										